

流行性出血病ウイルス血清型 6 の関与を疑う黒毛和種の嚥下障害事例

中部家畜保健衛生所

○福岡 恒・鹿島貴朗

流行性出血病ウイルス（EHDV）は、ヌカカが媒介するアルボウイルスで、シカ科及びウシ科動物に感染する。国内では EHDV 血清型 2 に分類されるイバラキウイルスの他、血清型 1, 5, 6, 7, 10 型の検出、分離報告があり、2023 年には九州山口地方を中心に EHDV-6 の関与を疑う牛の嚥下障害や流死産事例が確認されている。2024 年 10～11 月、県内黒毛和種飼養 4 農場で EHDV-6 の関与を疑う嚥下障害 4 症例に遭遇した。うち 2 症例と疫学調査の概要を報告する。

1 発生状況

症例 1（A 農場）：11 月 4 日、西部地域の繁殖牛 78 か月齢 1 頭が発熱、流涎、嚥下障害を呈したが、11 月 12 日に回復した。同居牛に異常は認められなかった。

症例 2（B 農場）：10 月 19 日、東部地域の肥育牛 10 か月齢 1 頭が発熱、流涎、嚥下障害を呈し、11 月 12 日、血液を採材した。11 月 15 日、発症牛は死亡した。

2 材料と方法

症例 1 及び 2 ではウイルス学的検査として、発症牛と同居牛（症例 1 のみ、3 頭）の全血、血清を用いて遺伝子検査、ウイルス分離及び中和試験を実施した。疫学調査では、2023～2024 年 8, 9, 11 月に採材した未越夏牛の全血及び血清延べ 350 検体を用い、遺伝子検査、ウイルス分離及び中和試験を実施した。

なお、病性鑑定で検出されたウイルスの遺伝子解析を実施中である。

3 結果

症例 1 では発症牛及び同居牛 2 頭から EHDV-6 が分離され、ペア血清の中和抗体価はいずれの個体も 128～256 倍以上であった。症例 2 では発症牛から EHDV-6 が分離され、中和抗体価は 256 倍以上であった。疫学調査では 2023 年 11 月に県西部、中部、北部地域で EHDV-6 抗体陽転（12/59 検体）が確認された。2024 年 11 月には県西部、中部、東部地域で EHDV-6 抗体陽転（28/56 検体）が確認され、うち 13 頭から EHDV-6 特異遺伝子が検出、2 頭から EHDV-6 が分離された。中和抗体価が高い個体から EHDV-6 が検出、分離される傾向にあった。

4 考察

以上の結果から、症例 1 及び 2 では嚥下障害に EHDV-6 の関与が疑われた。症例 1 では発症時に EHDV-6 の抗体を保有しており、感染から発症までの経過が長いことが推察された。本ウイルスは遺伝子検出あるいはウイルス分離される期間が長いことから、本ウイルスの関与を疑う症例では、経過が長い場合でも積極的に検査する必要があると考えられた。病性鑑定及び疫学調査の結果から、2023、2024 年ともに 10 月には県内に EHDV-6 が侵入しており、県広域でウイルスが浸潤していたと推察された。